



溫故目錄

四

安志



~ 5
2209
3



明 利 5
9.200
3



温故日録卷第七

文月

初凉

新式月令立秋涼風至云云 新拾遺秋上
早凉知秋といふ事也

秋と云は初秋といふ事なり 蛸のくもる也

残暑

身入

うほり香た力ありじりも秋也 流布 初秋也但
初中後より用事あり身も志も秋也

冷

云云初秋也暮秋の時分なり 流布 涸終
るといふ堀河次郎百首は風ひやうをうと

もよあり



扇置

為秋事可依也 新式 如此おもしろも只秋
下流布 垂と云字之向中よあまハ秋也 師説

弁扇

扇と指と云も秋也 言白筑州へ御下向乃
餞別は宗養とて百韻は言伊也

七夕

扇只思ひするも可き事とてあそくさきころハ秋の夕
神代より七月七日夕と契て牽牛と織女とあ

かり星あひを月つりてほつら説ありハ雲下略

乞巧奠

立庭徽 像盤水星 願絲
先七日をんハ益人伊てごころハ拭衣小

入て乞巧奠あり御殿乃庭はほくえ四きやくとそ

と灯臺九本とめく灯あつ机の上は色く物す

るり筆はこころとそ是とそくほくえの上火とり

よ衣ととくたくふれをれあり夕のひもあ辰入く

大さしれ星はほくそらふ三は様ありつひハ盤しき

調半品半律あまれちなり是ハ秘事とてゆるを

ちる人すくゆ一觸穢乃とれを猶行り天平勝寶

七年よそりするむわらそそハ牽牛織女と川の

一れあひあまハ鳥鵲あまれ河はこころりてほくそ

乃ハ橋となすて織女はこころりて南子に書

よとそり又續齊諧記よ云桂陽城乃武丁とつひ

一人仙道とて弟よかりていそく七月七日ハ織女

河とつて事とそりてあまハ渡也といひ

をれハ織女ありく牽牛ハ諸すこととそ是と織

女牽牛乃とほくあ也と世人ハ傳つて乞巧といふ

事とつてより事なこれと七夕祭とも云也香花と

そと供具とそりて庭上はゆり成をささけ乃

くハあまら乃糸とかきく一事といふハ三年ハ内

よ必叶とつて乃ゆめ乞巧と也都隆ハ腹中乃

よりの紅雲紙橋は舟よりの本文ありは舟と
〜と詠一 流布

天河

天河のあり瀬なり又舟はひそひそも非水邊
也夜分は五句也又天河は二星はなを
まに句より名取也水邊也難也河州はあり逢瀬を
と少し星はありはあふ勿論秋也 流布

年渡

一年は一度銀河とて心より後撰秋よ
むろ〜ぬぬわ〜わ〜のり〜ハ〜一〜

ちりりきん玄の紫今か〜と〜は〜は〜

梶葉書哥

是ハ此國ハ風俗ハ七夕ハ哥と〜
此葉の露と硯と滴て梶はかくなり

後拾遺

天河の河と〜は〜の紫よ〜事と〜
七夕ハ〜の〜の〜の〜の〜
草は〜の露と〜と〜の玉は〜軒は〜は〜

か〜と〜の〜ハ新勅撰家隆ハ哥也

秋去衣

梶葉草ハ露と〜ハ宗祇
七夕ハ具也 新式 万葉十赤人哥云

七夕の〜は〜は〜は〜は〜は〜

神代ハ令天棚機姫神織神衣所謂和衣古語拾遺

〜ハ朗詠去衣曳浪霞應濕行燭浸流月

欲消〜作〜是也詩の〜ハ上句去衣ハ七夕去

時衣也天川ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

引〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

續松〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

乃流水小〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜ハ〜

と云也曳浪浸流ハ河と渡意也

- 星合
- 星祭
- 星手向
- 星契
- 二星

牽牛ヒコウ 順倭名ニヒコ 比古保之ヒコホシ
又イヌ 奴加比保之

妻メ 迎舟ムカヒフネ 萬葉第八

牽牛ヒコウ 乃ハ 舟フネ 此コノ 河原カハ 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直舟ナカフネ
おゆハ 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直舟ナカフネ
こゝろハ 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直舟ナカフネ
かゝル 乃ハ 勢セ 此コノ 妻メ 乃ハ 渡ワタ 直舟ナカフネ

妻越舟 彦星妻喚舟 万葉十彦星乃渡直舟
とこし万葉よあり

妻送舟 新撰六帖 後朝乃哥云光俊

玉祭 玉佐可介祭 孟蘭盆とて...
儀式公事根源云内蔵寮御孟供とて...
座乃南北同は菅糸座一物法受て主上爰を御拜

あつと幻主此時ハナリ 天平五年七月よげり 免る

孟蘭盆と大膳職は... 倒懸救器ニ... 餓鬼ハ此餓鬼ノ苦とす... 連く... 中よ... とす... 孟蘭盆會と... 蘭盆經委... 報恩經... 入よ... 報恩經ハ十四日外

楸 こくろりも秋也 新式
秋也 流布 初秋は用也 新式抄

瀆 万葉第 十一小

波島より見ゆらうし此瀆之本久く知らぬ意ふありて
こころ今葉云は哥拾遺第十四も瀆ひえ記とあり
下句看よありてと入あり伊勢物語は瀆ひえ
とあり又下乃句看ふありと入あり八雲御抄
よひこころ云非説なり云云瀆母ある楸なり瀆萩
たし云うこころは物語としてひえこころいつる時惟清抄
云瀆ひえハ愚見抄ハ瀆はある家と云へ一首
鹿板鹿なご云がこころ定家卿庭上冬菘と
云題こころ
表とるぬ南の海のとぬびこころ久く知らぬ秋れと云
は哥ハ瀆此家の心あり祢題乃庭の文字落題よ
かる也云云師説ハ多し記砂のまこのうげと云

グひきーのこころなる瀆鹿こころなり 瀆疑抄こころ家
の哥ハは物抄本哥とせり又ハ物語のこころひきー
と後いさ記とせりなるなりとあると云へて云へ本
哥もさる人ささるるありえと云へぬと云詞也
今葉云瀆びこころ愚見抄ハ二説ありといつら一説ハ
瀆もた砂の塩はひくれとせり記ありと云へ家ハ
ひきーれやと高と砂乃と云へれと云へるが家ハ
鹿のこころたれハ瀆鹿こころ也又一説ハ一首鹿板鹿と
云やん海郎の家居ハ瀆はえゆると云へたり拾遺
も草ハ定家卿後鳥羽院慈野清事乃抄伴
よまわりて新宮三首ハ哥ハ中ハ庭上久の菊こ云
題としてよと云へる哥ハ如惟清抄こころハ物語ハ哥板
本哥こころと云へるゆえある鹿の事と云へると云へハ
説人の好むと云へたりて用ゆといつら宗祇ハ注ハ定家の

己禮文韻曰朝華也又字書曰槿者舜也毛詩有
女同車其顏如舜花愚謂舜朝榮夕衰花也故
毛詩倭訓呼舜曰朝顏亦不妨也由是日本俗
以為与槿蓋一共牽牛花蓋以倭訓共同是大
誤也宋人詩曰槿花箇下點秋事早有三牽
牛上竹末以此詩意見則槿舜与牽牛各
別也牽牛花此出於甲舍九人取之牽牛易
藥故以名之又或故人詩曰君子若桂性春濃
秋更繁小人槿花心朝在夕不在云

露草 月草也或曰此花八秋三月の中八日とんさ記ころ之
云袖中抄第三云月草ハ六月七月をたこと
さ記ころとんさ記ころ云或ハ八月ハ景物に入ぢあれるも
袖中代説とんさ記
七月の部とんさ記
鶏冠草花

別郎花

奈この草代事とて袖中抄よおほごらとんさ記
よいて花の志ろさこれおとんさ記よの万葉才其家持哥
秋の野ふ今とてゆめよのよれとんさ記花あひんふ

桔梗

古今拾遺をた物名よ
しりて物の名れ外味見

萩

字亦作藎 順
倭名 三月よわろ
濱 倭也 流布
幸ふれハ雜也穂乃ハ子色

芭蕉

霜をたしとんさ記秋
也 流布 他准之

水け草

秋也 天河よおりしりあ説るり一よハ水影
草一母ハ水懸草也是ハ稻ちり云云万葉才亦人
天漢水影草金風靡見者時來之よきり續在テ秋
顯昭云水け草ハちのけよおつる草を云詞を

松虫 一ノ声 義貞

鈴虫 松虫 鈴虫 絡繹 ありて

蝥 毛詩八卷曰七月在野八月在宇九月在戸十月在

蟋蟀入我牀下 宇ハあきざれの落敷邊と云又順
倭名ニ宇ハ門屏ノ之間也云云寒き多ハ十月ノ
床比邊へ来て啼也温なる間ハ野ニ居也

綴 救虫

促織 蟠織虫 鳴聲 如急織機 故以テ名之 順倭名

唐 良

蟋蟀之非同物其形ハ似て声ハうつれり蟋蟀ハ清く

藻住虫音鳴聲 ちとハ秋也りふすじ虫とてりし難かり

我蛻云云虫ハ藻よりつる小貝也水辺ハ

蕞虫音鳴声 ちとてハ秋也他准之入の
虫とてりし、親ちり 流布

事とていへば延喜二十三年四月廿日
よ宣命を下して贈官贈位ありの事ありと
昌泰四年此宣命をくやとてくは六十一代
朱雀院天慶三年七月十六日託右京七條坊婢
文子欲棲右近馬場其女甚賤不能營備纔祠
家側同九年三月近洲比良神官良種見年七
歳託日我所居之地必當生松不幾一夜间數千
株松生北野於是朝日寺沙門寂珍與右京
婢文子勲力造靈祠次年天曆元年六月九日始
移北野也天曆六十二代村上天皇元年也天德
三年右丞相藤師輔改規大慶自爾靈威日新
きふのまかりハ六十六代一除院此御時より
うれ官幣なき祇園に於て公事根源
小定考とて委元亨釋書等よとのとてり

司

十一日 定考 是也 是ハ昔六位以上此加階とす
人しかる藝能行跡格勤とてくはく榮爵とて
きふかり上て官此東北廊の座よはきて事ハ
次母朝所小就て三献此義あり次母宴總の座
此はく又をのく三献とてくはく此花瓜上て下此冠
よさる大臣ハ白菊納言ハ黄菊參議ハつりてん
其外ハこれ時のくは瓜瓜ははかり花よあすたてん
二月此列見同式兵此兩省より諸司此輩の
上目と選成らる事此列見とてくはくこれあり
りて奏すと擬階の奏とてくはくとてくはくひあり
ささりてと定考ハ中も定考と文字ハくはくして
と考定とてくはくさふりてくはく口傳とてくはく選叙令
よくりとて事ハのてくはく其儀式なるとハ次第小定考
十二日ハまると小定考とて大弁以下此東廳より著る

行ふ事さ公事根源小考定是ハ非逆 名目抄

年中行事哥合み

清水放生會 十五日内裏ははとわら事なり上

清水放生會

宰相弁赤府なく男ふみひふ宣

命内蔵寮出使みりふ柳八幡大菩薩と

人王十六代此御門應神 天皇乃御事なり

仲哀 天皇乃第四代皇子御母ハ神功皇后胎中

天皇共又ハ譽田天皇と名はをなる天下と

ろめ事四十年百十一歳此寶篋とたも色

治欽明天皇乃涉代は始て神と取て筑紫此肥

後國菱形池といふ所み跡とさなる人王十六代

譽田八幡丸也と託宣あり譽田ハも此御名八幡

ハ山跡乃号後ハ豊前國宇佐乃宮みり

ひけ聖武天皇東大寺建立此後巡礼一

と由託宣あり仍威儀とさのじふさ又神

託とて御出京の後ありさやそ彼寺ハ勸請

さる後とも勅使なくハ猶宇佐はまのりさ清和乃

御時ハ大安寺此僧行教宇佐はゆりてあり

靈告ありて今の男山石清水よりはりす

あり後ハ行幸を奉幣を石清水みあり

代は一度宇佐へも勅使をさるる二取宗廟

とハ天照太神并ハ八幡大菩薩此御事ハ八幡

大菩薩とハ御名ハ御託宣は得道來不動法性示

八正道垂權迹皆得解脱苦衆生故号八幡大菩薩

とあり八正とハ内典ハ正見正思惟正語正業正命

正精進正定正惠是と正道とハ大とハ心ハ正を

身口ハとのつとさるる三業ハ邪なくして内外

真なる諸佛出世此本源より神明乃密迹と云れ
 是つてあをりまうこの八方より八色乃播種と云つる事あり
 密教農唱西方阿弥陀乃三昧耶形なり其故と云
 行教和尙より弥陀三尊乃つらと云つてみえせ給きり
 光明袈裟乃と母うつてせゆしくきん僧頂戴して
 男山子ハ安置トキると云神明此本地と云事なり
 こそぬぬひひりくゆきと大菩薩乃應迹ハ昔より
 あまうつたうの證據なりと云ふや或ハ又昔靈鷲山
 して妙法花經と説き或弥勒なりとも大自在王
 井ちりとも託宣し中よりハ正代幡表と云く
 八方濃衆生と海度し本誓成し思入と
 崇敬し奉るべきと云放生會乃と云りハ元正天
 皇乃淳寧養老四年九月異國襲來此時大井
 神カよと云ふやすく異敵と云らばけけりこ

のら大菩薩乃託宣母合戦乃あひとわづのん成る
 一ぬ放生會を行へまをりと云り母よと毎年母
 諸國よりこの事と放生此の事最勝王經
 長者子流水品乃池魚乃事よりおられるよと
 よいさう成るるゆらひのりてつて延久二年
 行幸母雅とて六府以下供奉する事よハ
 なる早且よぬのを神興と云せ給ふ時ハ行
 幸此儀式として音楽此聲雲と云め衣冠のよう
 ひ目かやをそれ母ひさうと選幸此ありと云ハ神
 人法師原よとて白杖と云てかつぬ道り
 とらなる儀式也朝母紅顔とて在路よかこれと
 又母ハ白骨と成て郊原よとらぬと云せ乃ありと云
 たる事と云たり 公事根源

温故卷八

名月 月 月日

こほくさくさく 詞秋也但月次の月日
あまの日あまの秋あまの月

日なりとあまの八月次也 流布

眉 眉書

月日此影光多と秋あり

万葉才六

月多ありとく三日月根搔けりてひりまふあつても

ありさけし若月八雲のあまの月のまひさきありゆり

なるといふと女八眉は三日月此似とく八雲御抄

弓の字 非三日月半月也 八雲の

弓弦 字ありても綺語抄云いざ

ふ月とをふりてとらさく初る月成云又月八日あるま

あつひく其名うはまきり始ハ三日月七日八日かゝり

らり十五日とら月十六日とばいざとひ十七日とば立待

十八日と八居寺十九日と八孫まら廿日と八とらり月

廿三日といふはれらとら下旬といふとらとらあり

又ハ八十四五日より月此のぬえは長あつた

これと明の月とのゆへをれとくりくとも廿日以後

いへさきとらりとはと弦下弦とて月の半とて其

一旁曲一旁直若張弓弦なりと云下略

鄧熙釋名ありえとらり不知夜月不知夜歴日

の事袖中抄は委えとらり事ありをれハ不記之又

八雲御抄云望月八十四五百れ間也但万葉ハ八十九日

こかさくくともれ日ともれと藻塩草云此儀むたり

曆ハ望こ出す事十五日はかさくす

十四日十六日ともあり

晨明

河海云ふひら曉まて此月をあり明といふ
云然面まう朝きて残月と云秋能同哥

枕ハ八十五日より後の月と云と云といり匡房

續本朝弥生傳云十五日以後の月と八称晨月

云云 八雲御抄より十五日以後をいふ

朝 月日夕月日

月日は各嫌之但朝乃日夕乃日と
用之説を云云 朝附日と書之 新

式 朝附日ゆふげくひたりと八只朝日夕日なり日

五句嫌也月日ハ三句をいふ一但朝げくひなり

忌なりといふ月日五句をいふゆふげくひありひの忌

をいふ秋也月日ありゆふげくひ云云八只夕附日八日此来

秋あり流布 朝げくひ雙岳と云ハ朝日乃出

ひくひ月乃出をいふ朝月日なり

兩あり枕詞をいふ月日二なりひておんする

夕月日も同之 半月と云六日 一桂、花

只桂花と云ハ秋也 毎言抄 然るを或抄物云

後撰 云云 たるひをいふ久々の月なり

と云ハ此哥を證哥として花を春と桂實

三五 秋と詩より秋ハ實をハ秋ハ定也此もの也但

秋ハ今 秋ハ今 秋ハ今 秋ハ今 秋ハ今 秋ハ今 秋ハ今 秋ハ今

八雲御抄第三下云かつれ花ハ月日なり同抄

第四云秋くまきく月乃なりハなる下前みお

是ハ月乃なりハなる實もなる光を花のや

よらるる事有り云云凡月乃桂と云事有り

説々難決只桂 月と玉兔あり

乃花ハ秋なり 月と玉兔あり

注云南洲ハ桂樹あり生胎中月満ハ則桂乃生也

同注云月中玉兔あり月陰之精成獸兔なる

て獸乃形と云ハ陰乃類也故月ハ異名

奥儀抄 月ハ陰精乃宗也精氣決と云

て獸乃形と云ハ陰乃類也故月ハ異名

温故卷八

至兔と云也日ハ陽精乃宗也精氣はとりて會乃
 形とありて日中みあり鳥陽乃類也故日乃異
 名とハ金鳥と云也陽鳥カラスト云歴天記云日中有
 三足鳥赤色今按文選謂之陽鳥日本紀謂之
 頭八咫鳥カラス
 順倭名
 鼠
 昔有人於曠野中逐三醉
 象死緣藤命入井中
 藏無有黑白二鼠月齧藤將斷旁有四蛇欲
 螫サシ下有三龍吐火張キ拒クサ其八仰望二象已
 臨井上憂惱無託忽有蜂過墮蜜滴入口中
 欲是人童蜜全忘危懼大集經譬喻經もと委
 是乃月乃鼠こ乃なり月日此ゆき幸め
 鼠れたるの草とてさきさきとてかたきなり
 一切衆生罪あるも罪なきも無常乃使の晝夜
 追ツ追ツも不知日月此才よせまらるる素ハ彼草根

道ノ落けきて獄ガク率ツ此コノ呼コ責ツを蒙カらんと云夏ハ人々
 此コノも彼蜜滴ミツ此コノ眼メ耳ミミ鼻ハナ舌シタ身意ミの六根
 此コノも處トコロ乃愛欲アイヨクハ貪ヒ着ツして只今ただいまも苦
 惱ウレシとつとつと云云喻ユ也

後ノ毒ドク赤セキ陀ダ乃ノ抑ヨ鬱ウ成セイ乃ノハハああをを師シ此コノ乃ノ屬ゾク
 月清集ニ後京極殿哥也後頼家集
 我ガをを此コノ乃ノ移シととハハ鼠ネズミととハハ存ゾクれれううりりとと
 冬フユのノ草クサ紫ムラサキととりり日ヒのノ鼠ネズミととハハ成セイそそりり死シ
 乃ノととハハ夫ソノ本ホ乃ノ土ツチ御ミ門カド哥カ也

星一ヒト夜ヨ
 秋也月と云字は五句をくろへ新式日
 月三句也但名取あるハ白神ハクシととりりて秋
 月ツキ乃ノ師シ説セツ星月夜ヒツキヨ
 盃光ハヒカウ
 只星乃ただ星ノ乃ノ師シ説セツ星月夜ヒツキヨ
 盃光ハヒカウ

月よ衣之くく六日は二句可嫌之くく八可為秋新式
是して式乃月とりくく幸しありし 流布

し出塩 月れらけと塩此浦干と同一事なり
月乃初る付さす塩と月此事一なり

又月のかさぬとして一なりし事五それ八への字とす
難波くくちりくくまは心のふ初る月えらよるか

月の望とハころとふありし 十五
日ハハころ也故といつて秋ハ雲御抄下略
し都 月宮殿 此事

し晶 秋也月さし
てハ冬也
し友
し主
袖 旧よ
袖乃

月なりと二句嫌とくく袖はなとる月あり
し袖よくく月ありハ猶以くく也 流布
し鏡 似

と云也聖廟後集日月顔似鏡
無明罪風氣如刀不伐然

初塩

吳王臣伍子胥靈作潮每年八月十五日高漲
也方輿勝覽一曰吳王既賜子胥死乃取其屍

盛以鴟夷之革浮之江中子胥因流揚波依

潮來往蕩激隄岸勢不可禦或有見其乘白

馬素車在潮頭者上因為之立廟每歲仲秋既

望潮水極大云仲秋既望トハ八月中也子胥死

ニサニニ告家人曰扶吾目懸東門以觀越兵之

城吳乃自頸其屍ヲ鴟夷トテ皮袋ニ裹テ浙江

へ捨タリ浙江ハ杭州ノ錢塘ニアリ錢塘江潮トモ云

猶史記六十六伍子胥傳委或詩下千里色

中秋月十方軍聲半夜潮八月十五日の幸

なれども少前後

ししき用其事

も有之 流布

擣衣

八月十五夜に始て打也其前ハ不詠冬可詠る
何難欤ナニガタシカ源氏よも八月十日よりひきねるるれと

こころ十日よりひきねる

余則也八雲御抄

礎擣衣石也字亦
作石礎順倭名

駒牽

十六日 駒迎 幸ハ信濃乃勅旨牧此馬と六
十疋もしくとては十二疋りてゆりくも朱

崔院乃涉園忌みあつるに十六日よかりける
牧より駒ひきくすつと云也 天皇南殿より出御
なりて涉馬と涉後と上マ涉馬解文と奏す次
事して公以下次者も涉馬とゆり馬あつ
かたとりて涉前よすも一し辨寸取のこりぬる
とハ分濃使として次ゆりて院東官なく然久
きとぬへすつ 切原駒 とくも秋の御 無言抄か
公事根源

てハ秋みなりしゆりまのくこり可隨前好
あふ取のせれれ家とあをなりしをさつるきりりれゆ
りしゆりし秋の哥し

甲斐駒牽

十七日ハ又甲斐國乃穂坂乃御馬とひく
公事 年中行事 哥合注 三十疋なり

武藏駒牽

廿日ハ武藏國小野涉
る四十疋ひく 公事

信濃望月駒牽

廿三日ハ信濃望月
御馬廿疋公事

武藏立野駒牽

廿五日 拾拾抄 十五疋其外襖御
馬廿疋毎年奉りぬ 公事

上野駒牽

廿八日ハ上野ノ御馬五十疋ひく大
昔ハすづく月日なごさひる事ハなご

同く御馬數百疋まの事してゆりハははきもり

ハ分別す人さる但連哥

花野

薄

ハ八折まうせて野花林
なまら三月よきてあそふと云説あり但ちよある事
ハ八雲御抄よ秋乃未よち小初る云云後撰よ薄ま
らぬとつり

花すはれおやと記まをれふあんとハ秋まをり

薊

秋也かまふも其時ハ
尾花 薄たなり
枯生也仍冬なり

かこと袖中

抄母あり

萩

一殿一戸

秋也萩とつれはる色ハ名も名
きつらうや清涼殿の北の二すの前

乃れどよしてゆくと年中行
事可合注なとんといふ

萩と鹿鳴草

事嫌也

蘭

古今集物名よ。らぬとある是也野宮此哥合りも

此系蘭

草むら又秋とらふるくわし一題の根よらぬ

ホシ 本草云布知波賀萬。新撰萬葉集別用藤

袴二字こあり。又別よ藤袴あり。花下野似

て色紫也。白ひたり。二草一名あると。但詩家

苧

三月みりてあそ

葛

一花玉真一

秋也玉卷
葛ハ夏也

紫花

紫乃色うらあそ
しつと紅流布

紫莞

古今物名
まぶらり

鬼志許草

こころり紫菀也綺語抄
奥儀抄 五名扱袖中

抄をまらさぬく乃儀あり

穂蓼

蓼多花

蓼多錦

蓼多紅

新撰六帖 衣笠
内大臣哥云

蓼のよほれちりそぬみ夕日さひりそ秋のちり
かきまらり引并りそかきと合らる證并り引並付合はる

葛

ちりともちりともあく
ても秋ちり 流布

萱

かや軒端秋也秋母あすすと云一説あきとあは
るまらり 流布 かや蓍も秋也植物よ打越地へ

茅

萱よハあす只茅と云と又説よりやと
云物別あり云云是雜也又茅と云と

いりちりハちりやハ秋也かやちりやと別也六帖

又新撰六帖

も別ありあきり

草色付

叢色
まらり

色種

秋也種々草也種の名と書
也と云と云と云と云と云と

守田

植物よ
ち越也

田庵

居所よ打越嫌也新式田と守田
くらり作りてと云らり庵なれ

秋なり植物小

川田

植物よち越
嫌へ 流布

田色付

案山子

驚鹿

僧都

非人倫 新式山田けり
云事ハ玄賓僧都よりか

宗祇古今注

田色と云と云と云と云と云と

都

引板

ハ板よまらりしと云と云と云と云と
云言抄云ひと云と云と云と云と

別也

初一 九月は初雁と云ふ事あり八雲御抄云萬葉よと云ふ所の初雁の使と云ふ初五字

九月は初雁と云ふ事あり九月は初雁と云ふ事あり九月は初雁と云ふ事あり

櫻井王聖武天皇は上る所 考ふる所萬葉第八天平十五年秋九月遠江守

九月は初雁の使と云ふ事あり九月は初雁の使と云ふ事あり

詞林採葉抄云初雁ハ八月月中旬旬に來れ事

和漢と云ふ事 舊事より但文選日陽鳥翔

以て玄陽矣 為推日九月 國語日陽鳥至干

鴻雁來寒露 九月節 鴻雁來實云云

乃節母二番めたり 毛詩鴻雁篇注云大日鴻小日雁洪岸一音和名加利

田面 又頼れ得兩説ありとも田此字は七句嫌へ一

略之 一 金寒 九月も八月も一は三詞

月又ハ八月の節も 今般 其義 函字あり

秋と云云 一 使 九月は初雁の使と云ふ事あり

燕歸 燕巢と云ふも秋也 燕知社日 辭巢去 勸為車

也 春謂近春分前後 戌日 秋近秋分節前

後 戌日也 五穀乃神と祭日也 是と社日と云

鹿

三月より四月にかけて声するに鳴声等秋之生類
打越嫌よりす只ハ云ふがことと云ふと五音通
ハ流川といつて志をやすめ字してめんぬらぬせりぬす
かせ兒 八雲 實名也角此を云ふ云々たるやうなり
師説作り 雑多云説ありたる受
鬼 異名也とらとすすぐると云ふ
ぬ 無言抄
古今 秋の萩原のりて旅人といつて
此哥とも無名抄 済抄 奥儀抄 童蒙抄 小
鹿と云といつたり或ハワと云ふも
麻子ともかくといつたり多し
鹿と紅葉鳥 ちとす幸一切を代嫌
乃 異名といふも哥も悉くあき
このうぬ幸といつたり他准之かせ
連哥といふは

社父魚

鮎カサも

鰯鮎

落鮎

下鮎

崩梁

下梁

鱸釣

すさくといふハ非秋と云説あり
秋也 秋風思 尊鱸云本説
秋風よすさく勝なりハ秋風思
後秋鮎は他家集あり此哥ハ
晋張翰と云者古

翰 吳人入洛見秋風起思
菜羹鱸魚膾之事 詳見
支類聚

鶉衣

非動物 新式 法文あり
八雲御抄 只ハ衣の事なり
但秋 以季と云ハ生類ハ打越嫌
無言抄 鶉乃

五音通

尾代より唐子と云者き初より生類
 打越もさうさう也 新式抄 是と可用秋の交
 してより糸もあり丈本ニ從三位廣範御哥云
 今ハあはれびとある里み治すて秋さうさうの衣うん
 惣措 非植物ニ 新式陸奥信走郡とて志のぶ草と
 紋よりりさうさうさうし衣裳代色乃草木一准て
 可為秋秋可野 新式抄 志のぶ草
 かのさうさう秋也といり 無言抄

温故日録卷第九

長月

御灯 三日 三月のさう北本は灯とさうさう事也
 事根源 年中行事哥合

たひけする星はひらみまうさう事はさう秋はさう
 こと免り連歌よひおめせめくきま

野宮別

源氏聚木卷は九月
 七日むりりあはる

網代打 新式よあは藻塩草は九月九日代前子打
 初て宇治代網代人供御よさうさう又

しろハ宇治よかさうす田上よさうさう内膳司
 式云山城國近江國氷魚網代各下處其氷魚

始九月至十二月三十日供之今業近江國田上の網代よもれら氷魚を山嶽代守治してとらるる花魚

重陽宴

菊花宴 菊盃 重陽こり八九と八陽教

月九月ハ節日としては菊ハ菊花乃宴行りて是と重陽宴とす九月九月九月ハ月とりと九陽代教よ叶く少人ハ重陽とハハ昔ハ天子南殿よ出御まて節會行り上達部清子ららりて其道のハハ探韻行りて文臺よすくがて十月旬のまわす今日も氷魚とす例あり又群臣ハ菊酒とたまふハ大くハ五日ハ會おたり清帳左右ハ菜菓乃囊とけ清前ハ菊瓶とをく又ハ菜菓ハ此房とて頭よさくハ悪氣成るるといふ本文あり續齋諧記云貴長房

謂汝南桓景九月九月汝家有灾急令家人縫絛

囊盛菜菓係臂上登高飲菊花酒此禍乃消

こりきれん其日よらりてをハハ其身ハ清りたりて家中ハ雞犬羊こりて死らるるくれくのゆりふよてきハハ山のかり菊酒とらて菜菓と用ら事といひ傳へり年中行事哥合重陽宴哥菊りらりけ氷魚とらりてをハハ此のまら

煖酒

重陽宴よりあつて用り一条冬良公此清説よん

菊 八九日よかこすハ雲御抄よハ菊ハ万葉よ不詠飲寛平菊合以後名物よハあまらりて誠ニ見し着綿 源氏幻此巻なかに九月よ成て九月の菊ハ花を霜よあてると花の色よとあて菊

のきへみよと五十鈴川^{カサ}は神宮とけくらぬと
て外宮ハ内宮鎮座此後四百八十四年とてく雄
略^ハ天皇此^ハ清^ニ宇^ニみ跡^をとてまさをせ給ふ養老五年
九月十一日よとて官幣^を奉^り給^ふ公事根源
長月^やとて^ハ幣^はよ^いの^うと^あれ^るの^ふや^をと
年中行事^哥合^{あり}拾遺^愚草^負外^上よ
えくら^れの^やい^すれ^は母^の山^のり^もぬ^やま^の
を^とり^是と^連哥^はハ^はす^つり^あく^んつ

住吉市

十三日 拾玉集第三^三慈鎮^ノ哥^よ
あつ月八月の^ある^は恒^吉れ^は人^をさ^らり^をら

後名月

二^多夜の月後の今夜の月
あ^らも^れ十三^夜の^事

桂川御禊

西^川乃^御禊^也源氏^柳乃^卷よ九月十六
日^よ弁^宮乃^西川^と清^禊一^のい

本也^握乃^卷く^中臣^御麻^と奉^る事^あく^らら
明星抄^よく^り野^宮御^後と^五言^抄よ^あら

是^秋拾^友抄^よハ^亦宮^禊晦^日と^{あり}可^尋

撰虫

是^ハあ^らら^式あ^る事^よハ^あら^殿上^乃道^遥と^て
殿^上人^とも^あら^嵯峨^野あ^らく^じく^虫は^秋
よ^えひ^入て^奉是^ハ堀^河院^乃御^時と^りら^る
お^りよ^ら松^虫鈴^虫あ^ら誰^人も^内裏^よら^又賀^賀
茂^社司^をに^御ら^れて^もれ^をと^ん
公^事根^源 年^中行^事哥^合よ

露霜

露^時雨^也此^ハ二^色は^てハ^秋也^はか^ずと^も一^句
乃^内よ^むと^ひと^ハ秋^也露^霜と^むと^ひて^ハ初^霜と^て
り^も秋^也露^霜乃^さむ^れた^らく^ハ秋^をら^流布^と
但^露乃^早あ^らと^も雪^氷の^字あ^らハ^冬を^ら

冬 迹

待 冬

秋 避 而

秋 盡

秋をくくても秋は秋より猶さむる
松風をくく同前秋より乃らりもく

りつる山をくく云句も秋也他

准之流布

四木子とくふたね

山 色 野 色

植物は嫌打越但依句躰也新式句躰

よよとくくハ雪霜乃らるるは野山よじも

く植物よハ嫌野山れをくく新をれはくく

とくくくくくくくくくくくくくく

流布

野 山 錦

野 山 紅

山をよぬあふ嵐哉 紹巴
と云句は類秋をら

時 雨 添 山

タムク山や下その秋時 宗祇
たぐく云ぬ
くくくく句を引よゆらりもくも發句乃

たりろくくくくくくくくくく

一筆 ちくくくくくくくく

枯 野 露

秋也新式枯野は露氷と
くくくくは君あむくくくくくく

枯 野

虫

色このふ字わくれとれたの物も依じとく
てハ秋也秀とくくくくくくく
流布

裏 枯

草葉れとくくくくくくくく
園野邊原庭をの文字は入る也

草 枯

花殘秋也新式枯野は花の跡も同前枯
草こくくくハ冬也花をくくくくくくハ秋也わくく

此色たぐくくも秋也名草れわくくハ冬たれも花と
とく色乃字くくくく皆秋也 流布

尾花枯

すくなく秋に新式抄 宗牧句よ
おれの尾花よのすくなく大發句帳秋の部有

枯薄穂 枯荻穂

薄散 尾花散

蘆穂 芦穂綿

秋也 芦穂もあつて穂あり
しほいてハ秋也

葦の花

忘草

肖聞云忘草 忍草ハ一草二名也 綱疑抄
云忍草此草 兼載 聞書は穂トて昔より

忍草 忘草 同答 ちりさりと草此らちりさるは
てて詮をくく一草二名也 け分りて一垂トて

忘草と忍草もあつて忘草此草の名を授つて
け哥一草二名と云くくり續古今才十五段二位

頭氏哥也本草垣衣和名之乃布久佐

龍膽

衣夜羨久佐 倭名物名よより古今物名よ
我宿此花をくくくくくくくくくくくくくくくく

川上よいまのりくくくくくくくくくくくくくくくく
風さしをくくくくくくくくくくくくくくくく

新勅撰物名伊勢哥也但物名此外よめり歟
拾遺愚草負外上よ

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
此外古哥よ多わくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
と誹諧哥よよりめり

思草

乃辺乃尾花くくくくくくくくくくくくくくくく
右思草ハ草の名よハあつてくくくくくくくくくく

拾遺愚草上下

おびくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

古今事十一
秋のゆくゆくもあつては花のさうやあんなあやうと多
右尾花よゆうくと咲花は定家三龍騰乃花はあれ
よのうらとていつり以上訶林良哉暮秋の物也 流布

我毛香

じきりぬるあはれは我もかり秋もせとら白ひの雪
うらとらぬと云草也と云説あると道春野植はあはれ

晚稻

ととも稲也 八雲 暹稻乃小田も
オクテ共 稗もわく室は晚田をくかあり

穰

唐韻云 穰音呂 後漢書穰讀於路賀於北俗
比豆知自生 稻也 堀河次郎百首 穰を用ひ

或ハ穰もいつり

霜

は刈田かると云て
も秋也 流布

草駟

草 夫木燧山は穰蓮
松の種のとけりゆきはあはれと種もあつて山はあはれ

紅葉

よ時雨霜とじとひ
も秋也 流布
色 栲 たりとても秋
也色こ云字

入てハあはの

川 ちとてハ秋とらハ冬よか
あはれ秋同 秋はと云ハいつり 五言抄

紅葉のけの水ようつる 秋はとらハ冬よか
ちとてハ秋とらハ冬よか 只向
秋は随ハと或抄よいつり 但かやの事 連哥は
ハ或ハちとらあつてもなりとハあはれ 落葉れん秋ふ
くもあつてはつりよハ冬よあつとつり 他准之哥
ハ別也 但是ハあはれハ落葉也 猶人よとらあはれ

水 同

且散 秋 色 散
紅葉乃ちとら
冬ちとられど

色 露をじとひ

乱而 秋

葉雨止降

椎ハ紅葉也ぬ木なれども實故其名をとりてあつふ物
なれど椎ともなりも秋也柴も葉を秋也堀河次郎
百首六日番哥合なりと云椎柴冬乃題よ出せり
其故りや冬といふ一説あきとも連哥よハ秋也

落粟 粟ともなり
も秋なり

榎實 秋也榎といふ
つらハ雜也

利木子 花ハ葉也只利木ハ雜也實ハ秋也 流布 其月くよ
これいふよきて入他准之西行家集よわの成るもよあり

榎實 新撰六帖知家
乃少くもぬぬぬ之のハいふつよめむらけしりけ

同集信實

乃のれぐえのつらむらひりきて本林之れれをぬきぬ

榎 思ししとておもむきとすなれんさらぬ事かハあつりて
是ハ拾遺物名よこらこころ榎成よめる又西行家集

山つらも名よあつりてあつりてあつりてあつりてあつりて

胡桃 新撰六帖ハ姬越桃なつりてもよあり
此外の本ハ實よめとあつりてよふ及

霜踏鹿 ちかちか
も秋也

殘鴈 秋也歸鴈乃あつりて心なり一向不謂越路よあつりて
とそつりて心也 流布 かつりてあつりて鴈といふも春

也哥よハ冬つりてあつりて鴈もあつりて

千鳥 鴈よ結ひつりて秋也 新式又千鳥
よ露クあつりてあつりてあつりてあつりて

木枯渡鷹 秋ハ未よ來るもあつりて事也 三智抄
草なれとあつりてあつりてあつりてあつりて

衣擲袖霜

衣とて
も秋也

衾

よ露とひとひてハ秋也
流布 冬と云説不用

一重綿

新撰六帖知家卿

秋衣ある衣の衣はひとひてハ秋也

ウ

ウ

ウ

